

南北朝時代の雰囲気をとどめる興国寺の境内。左から、竣工後の湿度安定まで約2年をかけて4月に無隠元晦坐像が移された「開山堂」、県の文化財に指定されている「仏殿（観音堂）」、本尊のある「本堂」。本堂の前に見える柱は、開山650回忌法要のために立てられた「角塔婆」。



無隠元晦は、いつしか仏法の中心地へと導かれていきました。27歳のとき、万里の荒波を越えて元の国へとたどり着き、天目山の名僧・中峰明本に師事。当初から一目置かれていた無隠元晦は、厳しい修行を重ね、その期待どおり才覚を現し、悟りを開いて元の国に名を馳せました。

日本に帰国後は、筑前興善寺、博多聖福寺、京都建仁寺など各地の名刹に迎えられ、住持を歴任。そして京都五山の筆頭である南禅寺住持を務め、天皇をはじめ公卿、門弟を教化し、官寺での頂点を極めました。

やがて南禅寺住持を退いた無隠元晦は、晩年の余生を過ごす地を故郷に定めます。文和2年（1353年）この地にそびえる福智山南麓の谷あい、興国寺の前身にあたる天目寺（宝覚寺とも呼ばれる）を開き、ここで75年の生涯を全うしました。

開山の生涯を振り返り、横山哲志住職は「若い人がエネルギーを浪費するのはなく、それぞれが、その活力を志す方向へと向ければ、この町も地域も変わるのではないでしょうか。そのためにはまず、志を立てることが大切です」と力を込めます。

この機会に改めて「本来学ぶべきものは教科書の外にあることを感じた」という井形進さん。「学ぶことは覚えることではなく努めること。努めることによって同じものでも見え方はどんどん変わってくる。視野と世界が広く深くなる。無隠元晦の生き方を察すれば察するほど、そういう人生の教訓が浮かび上がってきます」と、無隠元晦について研究を進めてきた成果の一端を語りました。

県指定文化財

木造元晦禅師坐像（彫刻）

南北朝時代の作で、興国寺開山と伝えられる無隠元晦の像。まるで意志あるかのごとく、今にも動き出しそうな迫力があり、水晶がはめ込まれた目が生彩を際立たせています。禅宗では祖師の肖像彫刻を頂相彫刻と呼びますが、その中でも時代が古く優れたものです。骨格や顔の左右の肉付きなどが十分に意識され、細部に至るまで丁寧さここだわりをみせています。生前に彫られた可能性もあり、当時は丁寧な彩色が施されていたようです。かつて地元では「興国寺の黒仏様」と呼ばれ、夜になるとお寺の周囲を見回っていたという逸話も残っています。昭和31年3月、福岡県有形文化財（彫第4号）に指定されました。

今からおよそ7百年も昔に、リスクを恐れず、自らの志に従って大海原を渡った無隠元晦。その足跡が物語る人生航路の羅針盤は「志の高さが、その人の生き方を決定つけ、生涯を左右する」という確かな方向性を真つすぐに指し示しています。



↑本堂裏山にある開山の墓。脇には、そばで守るような無名の墓もみられ、その遺徳をしのがせている。

大海をも越えた大志があった



京都にある禅宗寺院の大本山5つを選んで第一位から五位までを格付けした官寺（幕府に保護された寺）制度。その下に十刹、諸山があります。なかでも南禅寺は、当初から第一位に位置し、足利義満の時には、天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺を五山とし、南禅寺をさらに上位の別格とする「五山の上下」に定められました。



↑南禅寺三門（重文）

はるか昔から時代の装いを重ね、寺史の厚みを増している興国寺。その開山が現代に語りかけるメッセージに耳を傾けました。

無隠元晦

「むいんげんかい」

福智の裾野と調和する姿が美しい郷土の古刹、興国寺。10月4日に、開山・無隠元晦の650回忌法要が行われます。ここで、かつて京都五山で頂点を極めた禅師の志に触れてみました。

「新たな開山堂で650回忌の法要ができます。強い縁を感じております。興国寺（上野）の横山哲志住職は、間もなく迎えられる大きな節目に目を細めました。今年4月、新築の開山堂に移った無隠元晦坐像、興国寺が誇る寺宝の中で、最も崇められてきた肖像彫刻です。開山堂建設と像の移設に深くかかわってきた九州歴史博物館学芸員の井形進さんは、この生前の姿を彷彿とさせる像について解説します。



「頂相彫刻で全国を代表する第一級の作品です。おそらく京都で活躍した名のある仏師の手で彫られています。頭部はまさに迫真的、人物そのものです。「人の人生は顔に刻まれる」と言いますが、この表情が無隠元晦の強い意志を象徴しています。」

興国寺開山と仰がれる無隠元晦は、弘安6年（1283年）に田川弓削田で生まれたと伝えられています。博多聖福寺で僧となり、常に高い志を持っていた

